

秘書大抵圖書 二冊
大泉燈斤 伏一通
同光雄台所出一通

0 150 cm 10 20 30

SEIKO JUSHI

詠歌大概聞書

上巻也三卷

下巻也三卷

詠歌大概聞書

其外入組

詠歌大概聞書上下二冊

出部名の歌字と三光院内府
につきて勉強さし大聞書

0 150 cm 10 20 30

SEKISUI JUSHI

蘇歛大概圖書上
三光院内府
泚誦釋

543
工
5
14-1

543
工
5



蘇軾大概

情以新為先

求人未涉之

詞以為可

用

詞不可出之代集新古今

此代之人而

不涉古今
遠近見
每言六
蘇主押

詠出之詞雖一句謹可除棄之

七八

十年以策人而錄出之詞
勢不可取用之

於古人詞者多

以其因詞錄之已為流例但取古奇

詠新詞事且句之中及之句若懶過

分を原氣二句之上と四字先之抄葉

之以因事詠古歌詞頗多今歌以記

以月以四季歌詠戀雜歌以立雜言詠記

詠四季歌以此之時多取古歌之終

あり乃止時多 凡て終れりとの心

久之乃月の桂 郭云なるやん

多海はこのちりやん 如し事全降何度不降之

年此内は春風あり 月ありの意者

はらりかちりこせ 何のくもあつらう

如此之類降二句更不可降之

常親念古歌之景氣可降心殊可見

習者古今仔細物語後撰拾遺之十

六人集之内殊上平歌可懸心心丸意

尚ホ 降非和歌之先達時良く系氣

世間之感表存知物中白氏文集第一
第一快常可推歌和歌深道各師近只
以舊歌存師深心於古風習調也先
達者誰人不詠之哉

詠乎大概

は抄乃作也

主務黄門定家

は抄の終起

後高杉院才七少子存後法親王権サ文

は抄乃時代

定家二條院の應保元年三十一海王後乃甲九

は抄抄升文をせしゆくの申頼河乃物主

是別を存親王の也知くは物老時の

賞格下所て書連わりの中教之を老後の

るるる了貞應永己壬午六十一歳なり後

らるる後乃たりるる

神代より始りしと云ふも古語石田ありてその理
的ありし所を古今序と云ふのやうなりぬ
こゝもふりといひし古序あり神代七代時質
人淳性歌を列と云り

上古より古語のこゝで今の歌と云ふは
人の志ありてふ所深く今世のうや
るまゝのうやある心の中より思ふの
こゝろ古語と云ふは今世のうや
と云ふ人のふ所ありて成ゆなり
三十一字の條を素素馬等乃也といふ
乃字より始りしは古今序と云ふ
馬等乃也也云國始有三十一字

目修古序あり

凡三十一字と肝要と云ふは古語の
とて古語とつてやめ呼はれ古語
我を古語と云ふは又旋頭根本あり
圓形ありと祖の大風也。大風起る
飛揚成如海内子還友邦言得
伊言項羽と云ふけて豊沛の
ありて墨酒燕飲の所志の
きりなりと云ふと云ふ一語と云ふ

是歌の語也

薤露蒿里と云ふ挽歌の語也薤露
公夫人の死をのり聖送と云ふは
蒿里

士大夫の好む送らうとて抗うる者集
たうとて送らうとて抗うる者集

大概

樂集教云大槩ハ大率也率ハ凡れと云む又云
のさつと云ふもさつと人好む大槩の引はる也
史記伯夷傳其又詳不概見何部と云
率意ハ皆ハ概ハ害と云ハ後ハ云ハ大槩
と書テハ少概と書テハ物付のさつと云
ハ送序ハ概見墳籍旁出子史と云ハ概ハ

大書と云ふもさつと云ハ概ハ一と云ハさつと云ハ
と云ハさつと云ハ子史と云ハのさつと云ハ率ハ存
簡易楊子墨子孫子ホ乃法子也史ハ史記存
漢書通鑑唐史宋史元史ハ乃類也
存存天子章云蓋天子ノ者也蓋者稱
率較ノ詳也又陳其大綱則細目必率也
之者道不也此域也矣
存存述義云率較猶樞機大略と結也又
子者有也蓋ハ送率其大略故言蓋と者結之
存存不也ノ詳也傳曰率一綱而萬目張故
陳其大綱則細目必率也天子者道不也此
大域也 け書乃大書と云ハけ子

をゆく志ありつゝまわらざる一しよりく
こくせり漢一代の和音乃物物は一冊決り
九二条家乃乃を習と彦宗格中納言
定家乃乃はまゝと本と下り也三巻つを
う古今と本とて何のよとせりし格
因乃はるけ一貫之の巻宛本乃古今と
て三本乃やと世人思り玉玉かうと色
望下りの中と直りて取捨定家乃本と
定じの附本ととりひかして見たりと
来乃家乃本と奥書今の自より三巻宛
亦とすゝん軍と宗格美門の乃本を用
るゝまわらざる也

情以新為先 亦人未深く心深

況又よ情人に泣氣を歌者 言る人の陰
うの氣乃物。少なり物なり也
白虎通よ一は情乃物あり喜怒哀楽愛
又七情と云ふ喜怒哀楽愛乃七情と歌
加はり白虎通よ一は情と云ふ泣乃字を泣氣
乃泣と云ふ情のりもれと云ふもれもれも
下り泣乃字を如くはる仁義礼智乃四
信を皆くもれも五者乃教と備へると同じ
又七情と云ふ喜怒哀楽愛乃七情とあり
喜怒哀楽愛乃七情と云ふ泣乃字を泣氣
性理字云情性一物并然不動是行也

感而遂通是情也欲便是情又行也

禅悟を以てして一任性といはれは凡そ各別乃

境象を以てして一任性といはれは凡そ各別乃

情といふは凡そ各別乃

心の本本本有る初乃の心主なり

釋者心も識也トクニシテ不識識微トクニシテ不貴也言は心

のしくは凡そ各別乃の心主なり

海深乃の法形カクチも一十言は海身下ツラカも一

義也

曾子トクニシテ一以貫之と云くわ信乃の心也

又未始有る心は亦理と具して是も一也

是也といふは同一の心なり

心從親性オハ執心トクニシテ唯心法といはれ三家の主なり

法を本也キニシテ塵穢キニシテを心と云ふ人の心法は貪瞋痴

を心と云ふ人の心法は嗔を心と云ふ人の心法は

の心と云ふ人の心法は未至現在

の心と云ふ人の心法は不可知なり法法乃

非也トクニシテ不可得也法法は凡そ不可得也心法

本身形相ありてなり心法を本身法なり

心法一而乃心法といはれ高心といはれ心

や法乃人の心法といはれ心法一切法法を

善惡より生ずるの因縁といはれ今世も心

乃ありて心法といはれ心法

意を眼耳鼻舌身意より生ずる心法也

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

とゆふとわたりて

詞の舊可用

詞不可也三代集先達之所用新古今
今古人效因可用之

詞の旧可用と云ふは詞不可也三代集とあり

又新古今古人等同書可用之

山家冬序の詞は詞不可也と云ふは甚深なり

と云ふは三代集乃詞なりと云ふは詞不可也と云ふは

用之古今の詞は詞不可也と云ふは詞不可也と云ふは

詞不可也と云ふは詞不可也と云ふは詞不可也と云ふは

詞不可也と云ふは詞不可也と云ふは詞不可也と云ふは

新文初巻初巻乃字名乃くちを初巻と申
先達存くは三代乃撰集と云乃くは撰集と申也
以後又和字後夷と云と後普光園抄政成所也
志と申くは凡所より改られく再和字乃る也
より是如河らる也

西條三代集と云くはと云くは河乃くく
と云くはなると云くは作方と云くはなる
きは成くも新志と感深くも也
九世と云くは人のく多くは河つひんも人の
後やと云くはくもなる也況和字乃河才也
并運りくわくはと云くはと云くはけりも也
と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは

安部乃清乃くはと云くは河乃くはと云くは
夫名 時多と申の 甲 甲と申の 乙 乙と申の 丙 丙と申の 丁 丁と申の 戊 戊と申の 己 己と申の 庚 庚と申の 辛 辛と申の 壬 壬と申の 癸 癸と申の
と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは

と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは
と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは
と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは

と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは
と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは
と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは



いそろあしつらくしん

うら志かり落つし集りつは年風推集入
る才一乃あやまり也おある風折あくくえとせら
ぬ何かえん成りおある依見流へ和言を指南
しあまし時只詞と折くとりありしは境
大も也言者終思重すか

秀秋とまへうを取て去し乃也是才一乃誰多ら

は信てくく経流之所謂堪徳乃先達をぬと
り能秀言と流をりるあれとを本とすり
うとつらわたり物なり

又堪徳乃先達をれとて毎歳は秀言ありと
あつとゆらぬは堪徳乃先達乃秀言を
とつて大切なり也

唐人を訪一書ありて子我乃後まてあると
り志物なり日本の習るいさ一旦秀逸あれ
と地乃秀逸をぬ人なり堪徳も先達も
いさあつとゆらりも乃大もはしれ也あ
之をわかれり先堪徳とまへとぬとくは
る乃終由て送用とを思ふのおあつと堪徳
先達とあつと又一書とて是送用とを思ふ
る人なり乃傳受乃流して習得乃は人
なり全先達をたあつとゆらりて堪徳

先達ありぬ人あり先達多しとも堪終なりぬ人
もさりあてりか也は二かお急いふをさ也はく又秀吉
よ習へしとりのみく又一筆いそぐり堪終ん志も
先達ちり人い何もあてあなりよまはしそてあも
ありはるけいよもむく先達人いまた堪終あく
先達ちり人のそは申すも秀逸のちと暇あけ
習へし也い先習へし方を何とぞ別とんさる
うよい治の古今をそと論せとて寫さるうて
い治なるしとりのるし吉中吉のうもとりて
あくい直うとて其後生乃暇あてる何れせ
況みけんそとらよは奥の百竹首と古今と交
るそてのせとている是よりい方とら筆よんさるぬ

ゆさ也さくよ孝若乃用いありは奥乃うて
いとていふとより詞とていふまたあはさる乃
而新事新されしうとていせよのぬしき乃風
物いふぬくああるもの也一てんといふとてい
志も也人のとすもまた風流なる様神なり人を
又書あよ身とてあはるは流乃とよりいなる人あり
いまた一思ふとよりあては思ふのしとていなり
而終りまの風流あはれ流終乃とくとのあり
いんと風流うとていさ也さくも治よりそと
一書あり

風流可致し秀吉とて大切なりぬし
胡教の作働通作勤 教よ人偏とてゆははり

效

いふ初め字なくしてのやと音より詠へり尾
これのやゆかりのつらきものなり

けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

陳拾遺 けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

陳拾遺 けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

後抄 けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

後抄 けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

又云者乃てたけしきなりてたきなりゆきぬはり

けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

けしきなりたりのつらきものなりてたきなりゆきぬはり

近代之人所誦也之詞雖一句後亦可除弄之 七八十

本人取用之

是よりいふ乃てたけしきなりてたきなりゆきぬはり

乃奥義を極まりしれりる歌重直世義而説

偈云と評又よあつたて重て世義を宣人と説

て而偈を説て言といふや印といふと新と我

く海にまき

西冷全集の集を片用了了丁一のあつた

いそ用志部乃才一のちうの人のちうの詞をわき

ちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

いそちうのちうのちうのちうのちうのちうの

小かりてのやそと久しうりてわらわらも
雅好うて有縁とやうく思ふ程乃ち先
あそむかたよくふりてきて来り人よれ
と知れりとも才一乃ち也うと老れりも
知りていささか号をも我わうと志く先
うらと思ひてしり知りて澄信朝臣の幸
よしありきけ誰かあつたも物よすれん
よはれりやと久しう人よと久せうく
はと久也

又出流し頃陸河御歌

甲斐の地なるは海に増えれて若し平なる白を
とまよとまね持てし乃ちと建保乃比ま奇

とてすはとて改はれは流るるなり

楊花は流るる時とくこの山乃流るるわらわ
乃奇也基定朝臣

第一は杜風とくぬきなりとて三つあり杜
今乃成るる杜風とく世の方んとて物持
とく流るる玉江乃流るる杜風とく物持
は乃流るるなりとて三つありとて
この花よくせむ風をわきし流るる種は
あつてのいふれあつてのいふ

於古人歌甚多以其詞深之と為流例

市之書及成乃人のふんせき詞の用也

は後より古言と云ふやうな物也

古人と云ふは代集以前の作を指す也今集の作
乃作を云ふなり

又修むかたれども古言ふらそいふれども
て取用する連綿也

願阿云本方を後拾遺ナリと云ふは川流言
作を指す後類外言方なり

又云んば百首作を人あそりて自作を人の
言のあそりて言のあそりて言のあそりて

言のあそりて言のあそりて言のあそりて

古言と云ふは古言一の古言也古言は別して修言

と云ふは取古言ナリあり古言は古言人古言と
修言あり或る詞を取んて古言あり或る古

言を取て古言と修言あり或る古言と修言とあり
古言あり古言と修言とあり古言と修言とあり

古言と修言とあり古言と修言とあり古言と修言とあり

古言と修言とあり古言と修言とあり古言と修言とあり

古言と修言とあり古言と修言とあり古言と修言とあり

古言と修言とあり古言と修言とあり古言と修言とあり

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, starting with a large initial letter.

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or document.

Handwritten text in cursive script, including a signature or name at the end.

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or document.

Handwritten text in cursive script, ending with a signature or name.

石乃四首 寄美兼乃四之詞と云はりきう。

在り中よりうらりありありと云はりしは後ほの非
と云はり後ほ。

此の中よりあるをうらりしは後ほと云はりしは
は類れと云はりし。

上吉をぬい中吉のうらりしは後ほと云はりしは
中吉のうらりしは後ほと云はりしは。

詞のうらりしは後ほと云はりしは後ほと云はりしは
後ほのうらりしは後ほと云はりしは。

云はりしは後ほと云はりしは後ほと云はりしは
後ほのうらりしは後ほと云はりしは。

宿禰子於一書能と云はりしは後ほと云はりしは

日夕也一字と云はりしは後ほと云はりしは

八月梅花と云はりしは後ほと云はりしは

失之秋自得様斜跡新楚人うらりしは後ほと云はりしは

人取角下と云はりしは後ほと云はりしは

白髮美人頭と云はりしは後ほと云はりしは

胡お陳仲道白髮三行と云はりしは後ほと云はりしは

杜子美り溜水と云はりしは後ほと云はりしは

山岩る平原秋樹と云はりしは後ほと云はりしは

世に言ふ事少し思ひたり言ふ事多し人よけれはるる言ふ事少し
事少し言ふ事多し
言ふ事少し言ふ事多し梅乃花折てささく人老くつや

躬恒

老かれぬは人

とよちのちのちのちのちのち

朝云
言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

大和

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

言ふ事少し言ふ事多し言ふ事少し言ふ事多し

大拙のりり今の世に非る子首よまぬ人ありん
歌の程拍子もや成てらうと云ふも来せらる
一又部よりてるもぬ程のうも清くとも人
ありんこれ程の響古きともわきまをまをた
ら

以同半泳古歌洞願を念致以元海記以中季致
泳忘難致以忘難致泳中季致ぬは之時世取
古歌難致

あし月乃山竹る 乃く野のう野の心
久さ乃月乃桂 郭公ちやさ門さ
玉作この乃新人 以同半全隆何度も持く
ま作ゆまふんさる 月やあぬまむし

梅りの年の志と風 月のくまあーらう
あは類陸二句又もて海く

以同半泳古歌洞願を念致以元海記
向ものなすあささほほよ以元海記以月海り
とらるま是也物まは以元海忘以難海難甲

物まは是は毎夜の也黄門の所成持は多
何れ定せやうらよら

大元は梅の白ひよふえつらりてそめまの月
思ふさといふのいけんあまの月行むしお

以後よりを新と海下り。幸才と云えあてたる叶う
さよとあてと又音あてたる和名もさ下たるも也
此乃同月の上乃一箇首あてたるは海下りて
海下りて海下りたるはさよと云てさよと云て才免のを
をわたりし物也才免あてたるて而しりさく
吉乃才免をさよと云てさよと云てさよと云て
免乃る凡人の物也さよと云てさよと云て也
才免のあて人乃るを綿さて銀さつりたる物
なりと云てさよと云て物し普光園の抄紙の紙
はさよと云てさよと云て海下りたるはさよと云て
さよと云てさよと云て和名乃る才免と云てさよと云て
人乃るさよと云て海下りたるは海下りの物也

りし物と云て海下りたるは海下りの物也
さよと云てさよと云て和名乃る才免と云て
は物と云てさよと云て海下りたるは海下りの物也
叶うと云てさよと云て海下りたるは海下りの物也
みて見たるは海下りたるは海下りの物也
見習ふと云て物と云て今伊勢物語海下りたるは海下りの物也
なりはさよと云て海下りたるは海下りの物也
と云て海下りたるは海下りの物也
平中納言作博の云国光海下りたるは海下りの物也
うと云て海下りたるは海下りの物也
海下りたるは海下りの物也
と云て

とていりし子と親をふりしと世間の時を也

世間感表

是又作念乃時可思しとら也唯の所人の所なるもの
とらるゆへに又思しとらふをて軽し人又を重なる物
後乃境もれはかあま乃お後言らとらると人の
とらるゆへに又思しとらふをて軽し人又を重なる物
眼お乃さるゆへに親人のさるゆへにまた重なる物
本なる世らの感表乃親今あり凡そとらしむ
若れとらるゆへに唯念一念くもた也はとらとら
的は後乃感表ありとらるゆへに又思しとらふを
法法の空相く又思しとらふをたはとらとらとら
無常と思しとらるゆへに又思しとらふをたはとらとら

乃中よりあむ常の神とまたり集る穀物とてゆへ
物とれ無常とてたれんはくはとらとらとらとら
傷とれとらとらとらとらとらとらとらとらとら
標念乃念業とてとらとらとらとらとらとらとら
とあり又殺と神とてとらとらとらとらとらとら
とあり和方乃本なるの田とらとらとらとらとら
しとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
皆成住境空乃四劫とらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

おの物由

物増敷に物を事七と注あり

文学物五本事平に五終始

又致知格物と云、致知在格物と訓あり

その海、物なる内、事乃と云とあり

おの物由乃事と事と訓し、注あり

道家乃格物を事と書きてる本あり

このうとわたり、事と道遠なるものあり

わきとわたり、格物注あり

おの格物の四字と事と云とて、事と格物と

の事と事と云とて、事と格物と云とて、事と格物と

は、事と格物と

白氏文集 唐易字を樂大氏を白唐の代り云あり

わたり、格物と云とて、事と格物と

白氏文集、事と格物あり、白氏長安集、事とあり

東林寺、聖賢寺、あるの格物、事と云とて、事と格物と

卷の教るあり

今、事と云とて、白氏文集を七十卷とて、格物

三千五百首、四百首也

才一才二候、候なる事、注あり、書の事也とあり、唐白

才一候、注あり、注あり

才一候、三首、二百首

才二候、三首、四百首、二首、才一才二候、注あり

才三候、三首、二百首、一候、古事、注あり

白氏文集才一才二快と云るを才一の巻より才
六の巻より五の巻まで律の詩は内は唐詩
體の詩も抑々あり王昭君上湯人凌園妻
も内はあり後白氏文集より一と云ふ所の
卷一凡そ夫々をわきまけて抑々あり
あり少く和方乃の海と云ふなり也
常可撫順と云ふ右と云ふと見らるるなり也
深く和方乃の海と云ふ也古人海は文集と
不詳傳くと雖も一と云ふなり源氏と云ふ卷一
左邊の所は卷一の所は文集は海と云ふなり
抑々あり和方乃の海と云ふなり一と云ふの
乃大綱の所は和方乃の海と云ふなり也

白氏文集乃の海と云ふは陸和致先達時
系和と云ふなり白氏文集一常可撫順と云
ふなり一と云ふなり文集一海と云ふなり
系和と云ふなり和方乃の海と云ふなり
文集一才二快を肝に云ふなり一陸和致の
乃の海と云ふなり也

和致と云ふ師匠は素^高致と云ふ師匠は吉^松月習
洞知と云ふ名は凡人と云ふなり
白氏文集乃の海と云ふは和方乃の海と云ふ
常古方乃の系和と云ふ致を云ふなり海と云ふ

古人の糟粕也我車と作りは種く乃故矣
昔の糟粕也我車と作りは種く乃故矣
昔の糟粕也我車と作りは種く乃故矣
昔の糟粕也我車と作りは種く乃故矣
昔の糟粕也我車と作りは種く乃故矣
昔の糟粕也我車と作りは種く乃故矣
昔の糟粕也我車と作りは種く乃故矣
昔の糟粕也我車と作りは種く乃故矣
昔の糟粕也我車と作りは種く乃故矣
昔の糟粕也我車と作りは種く乃故矣

いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智
いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智
いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智
いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智
いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智
いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智
いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智
いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智
いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智
いそ後女河とこれ初なる大聖文殊の四智

以書新お師

四方とたつたれの時とあそとささうて美華代
四方とたつたれの時とあそとささうて美華代
四方とたつたれの時とあそとささうて美華代
四方とたつたれの時とあそとささうて美華代
四方とたつたれの時とあそとささうて美華代
四方とたつたれの時とあそとささうて美華代
四方とたつたれの時とあそとささうて美華代
四方とたつたれの時とあそとささうて美華代
四方とたつたれの時とあそとささうて美華代
四方とたつたれの時とあそとささうて美華代

可修作也

心かこ落てつるわ紅葉もれつけらうまはあそ

秀歿之時大畧

此大略と云は、澤方大畧と云へる曰ひて秀方
を澤方と云ふは、^{澤方}百修書と大略と云
義し、^{澤方}内而外乃ちあるる古今を述ぶと論せ
ると云ふ事を見ても、^{澤方}の始末也

治老時之實蹟書連之古今相交指指を
抄録

卷 況又十年九年と云ふ老老と云とあり
也コシ孔よりい十九年と云ふ老老と云とあり
時字は、^時園也、^時不の也とあり

九州大學圖書印

